

甘利千枝子さんのホームページの文を紹介させていただきます。

私どもの姉 大久保敏子（栗林）と一緒に栃木県上三川町に集団疎開された方で、昭和二〇年当時、戸山町にお住まいでした。

太平洋戦争のさなか、東京・早稲田に住んでいた私は学童疎開とって、一時的に栃木へ疎開しました。

何十年の時を経て、当時の友人と訪ねた私の、小さな旅……。

これは、一九九九年NHK「小さな旅」に取り上げられ、放送されました。

小さな旅

甘利千枝子

私の手元に今、三枚の写真があります。

ギンギンの太陽の下、小学校の校庭に白髪頭の私たち七人が並んだ写真。そしてお寺の本堂のまえに、皆で並んだ写真。それから、寮母さんの家の前で撮った写真です。しかし、この写真を眺めると、この場所、五〇年以上も前の思いでの場所なのに、皆の顔が、あどけない顔に見えてくるのが不思議で

す。

昨年六月、小学校時代に受け持つてもらった先生の傘寿（さんじゅ）のお祝いをした席で、急に誰かが言い出しました。

「ねえ、あのお寺、どんなになっているかしら。行ってみたい。」
「行ってみたい。」「いつてみたい。」

そして、暑い夏の日、この、日帰り旅行は実現しました。遠くは、福井県から来た人もいました。

昭和一九年八月、太平洋戦争は、どうにもならないところまできていました。政府は本土決戦に備えて、足手まといになる学童をとりあえず、近県に疎開させることにしました。私たち六年四組は、牛込区（現新宿区）戸山町、若松町の二年生から五年生までの児童と一緒に、総勢七十二名で、栃木県河内郡上三川（かみのかわ）町にある「普門寺」というお寺にお世話になることになりました。私の班は、二年生の羽鳥さんをはじめ下級生が四名、六年生が三名の編成でした。

お寺の前の農家では、ちょうど「かんびょう」の取り入れ時で、夕顔の実をくるくる機械で剥いで、庭一杯に干していました。隣にある白鷺神社には白鷺が住み着いており、田園の上を悠然と飛ぶ姿は、それは見事でした。また、田圃を飛び交うイナゴの大群には、本当にびっくりしたものです。イナゴを捕まえて、おかずにする事も驚きでした。何かもが珍しく、あつという間に一ヶ月は過ぎていきました。

秋になり、ススキの穂が揺れ、ふと感じる風の冷たさに、私たちは、だんだん親が、家が、恋しくなっていました。お墓の所からは、地平線に夕日が沈んでいく様子がよく見えるのです。

「お母さん」誰かが叫ぶ。とみんな一斉に「お母さん」と叫びました。

お母さんに会いたい。東京に帰りた。考えることは皆同じなのです。誰かが泣き出すと、みんな声をあげて泣きました。

今、地図で見ると、栃木県から見て東京は西の方角ではありません。しかし、夕日の沈む方向こそ東京と信じて疑わなかった私たちです。私たちの班にいた羽鳥さんは、まして二年生。毎晩毎晩「お母さん、お母さん」と泣きました。私だって親が恋しいのに「今度の日曜日きつとお母さん来るわよ。」そんな嘘をつき、そんな慰めの言葉を信じてか、羽鳥さんは眠ってくれました。

翌年の三月、私たちは卒業のため、東京へ帰る事になりました。東京へ帰りたいう下級生のことを考えると、胸が痛みました。石橋駅へ向かうバスの中から、私は羽鳥さんを探しました。羽鳥さんの白い小さな顔が、みんなの中に見え隠れしていました。

そんな思い出の普門寺を、私たちは一度も忘れた事はありません。しかし永いこと、この思い出に触れたくないという思いが、私たちには強かったのです。六五才を過ぎた初老の私たち。戦後五〇年が経ち、やはり自分の命を守ってくれたお寺を尋ねなければ、自分たちの一生は終われないのだという思いが皆の中にあつたのです。

東北本線に沿っておよそ一〇〇Km、新幹線で行けば宇都宮は一時間の距離です。その二つ手前に石橋駅があります。しかし、あの時の様に私たちは、普通列車に乗って石橋駅に向かいました。

「この川だわ。わたし線路に沿って歩いて帰れば東京に帰れると幾度も思ったの。でも、来る時に大きな川があつたから、やっぱり帰れないとおもつたの。そう、それがこの川なのよ。」
クラスの中で一番小さかった岡田さんの言葉に皆うなずきました。あの時のせつなさがよがえりました。

「近くの床屋さんみたくないところで、夜、映画を見たの覚えてる？」
「ギンナンでみんなかぶれたわね。」

「そう云えば、李さんの事覚えてる？北朝鮮へ行く最後の船がくるって、お母さんが迎えに来てくれたの。今頃、北朝鮮の先生でもしているかしら。」

覚えている思い出が違うのは、やはり私たちの思い出が遠いものになった事なのでしょう。
やがて、思い出の石橋駅に到着しました。小さな駅を想像していたのに、駅は二階建てになっていました。駅前の食堂で昼食をとり、今は亡き和尚さんの墓前に供える花を買って、私たちは上三川町に向かうバスに乗り込みました。鬱蒼と樹木が森があつたなあ。田園がどこまでも続いていたなあ。頭の中に当時の風景が思い浮かび、皆の目は、窓の外に釘付けになりました。しかし、田園も少し、鬱蒼と茂っていた林も、今はありませんでした。四号バイパスが町の中央を北に走り抜け、やたら明るい町に变身していました。

あの時、木造の二階建ての校舎だった小学校も、三階建ての立派な建物になっていました。

「ねえ、おばさんたち、この学校に通っていたのよ。」

「戦争って知っている？お母さんと別れて、子どもだけでお寺で暮らして、この学校にかよっていたのよ。」

校庭で野球している少年たちに声をかけました。

「ふーん。何年くらい前？」

生まれた時から平和の中にいる彼らに、私たちの胸の内は、いくら喋っても、おそらく理解されることは無いと思われました。やがて、私たちは普門寺に向かいました。昔の畦道など、どこにも見当たりません。

「霜柱が五センチ位あつたの。覚えてる？」

「覚えているわよ。この辺から、遠くに筑波山が見えたんじゃない？」
懐かしい道でした。

「何しろお腹がいつもすいていたわねえ。」

高いイチヨウの大木が見えました。

「普門寺よ！！」

誰かが叫びました。私たちは、お墓の所に立って本堂を眺めました。七二名の児童がうごめいていた、あの時の喧嘩が嘘のように、ひっそりと本堂は立っていました。田舎にしたら、これは大きなお寺に違いありません。しかし、ここに七二名の児童が入れたのかしらと思うと、本当にその小ささにビックリしました。よく雑談の溜まり場だった鐘突き堂。そして何と言ってもイチヨウの木が大木になっていたのにびびりました。今年も又、たくさんのイチヨウの実を宿していました。

私たちがお世話になった和尚さんは、五〇代で亡くなっており、こればかりは、あまりにも遅すぎた訪問に心が痛みました。日光東照宮の鳴き籠の妹にあたる龍が、本堂の天井に描かれ、徳川家からの数々の品が飾られていました。こんなにも由緒あるお寺であつたのに、政府の命令であれば、やむを得ずお寺を開放したのでしょうか。そう言えば、病気になる在庫裏に寝かせてくれて、優しい和尚さんだった事を思い出します。

地元、上三川の方たちにも随分ご苦労をかけたと思います。毎日曜日に必ず、ぼたもちやお赤飯、お菓子を作って、替わりばんこに来てくれました。そして、時には何人かずつ自分の家にも招待してくれました。お寺が苦勞しているのを見るに見かねた檀家さんだったのか、それとも親のいない私たちをかわいそうに思っただけだったのか、いまと違っては、知るよしもありませんが、この温か

い志に私たちは、随分すくわれていたと思います。

お寺の本堂に案内してくれたのは、私たちがお世話になった方のお孫さんにあたる今のご住職でした。柔らかい物腰、優しい眼差しに私たちは、あの時の和尚さんが重なり、はつとしました。

「ここにあなたと岡田さんが座って、東京から来たお母さんの手紙読んで、ワーワー泣いていたの、今でもハッキリ覚えてる。お母さんに心配かけて悪いって。」あの時はつらかった。」と岡田さん。

私は、下級生の世話に泣き、彼女たちは、同級生のボスを抱えた班長として随分苦労していたのでした。本堂の外に一間の回廊があります。そこに座って見ると、一瞬にして、子どもの時の自分がそこにあるのを感じました。ここに寝転んで、天井を見てみたい。二年生の羽鳥さん、六〇才を過ぎて、どんな思いで疎開を思い出しているかしら。しみじみ会いたいと思い、胸が一杯になりました。

「私ね、子育てしてる時、いま戦争が起こっても、絶対子どもは手放さない。疎開はさせないとおもったの。」

「え！私も。」私も。

同世代の私たちは全く同じ事を考えて子どもを育てていたのでした。親が亡くなり、自分一人で生きていく事の心細さを、実感として私たちは、あのとき、感じていました。親が敵にやられて死んでいくなら、私だって一緒に戦って死にたいとすら、思っていたのですから。戦争が巻き起こした悲劇を私たちは、絶対に忘れないでしょう。

お寺を後にして、私たちは、雀宮に向かいました。かつて私たちの寮母さんをしてくれた猪の瀬さんが健在とお聞きしたからです。今は、息子さん夫婦と大きな家に住んでいらつしやいました。

「良く覚えていてくれたわね。何にもして上げられなかったのに。」

親のいない私たちにとつて、猪の瀬さんは親代わりでした。一日の出来事を聞いてもらう。霜焼けの

手当をしてもらう。ボタンをつけてもらう。それから夏のある日、すごい雷がなりました。日光連山を北にもつ栃木県の雷は、東京の一〇倍くらい怖いのです。猪の瀬さんに皆しがみつき、ワーワー泣きましました。霜焼けが崩れてしまい、宇都宮の大きな病院に連れていかれたのも猪の瀬さんでした。石橋の駅から、真っ暗な道を猪の瀬さんの手にしっかりつかまり、お寺まで歩いて帰ってきたのが、昨日の事のように思い出されます。

一度は尋ねたかった上三川、いや、尋ねなければならなかった上三川への旅は、終わりました。

「平田さん、死んじゃったのよね。」

帰りの電車で大塚さんが言いました。せつかく疎開で助かった命のはずなのに、五月二五日（昭和二〇年 一九四五年）早稲田方面を襲った空襲で、陸軍の掘った立派な防空壕が煙突のようになって、片方から火が入り、一瞬にして二〇〇人以上の人が焼け死んでしまったのです。ボスとして君臨していた彼女、あんな強い人を襲った苛酷な運命、皆、思い出してしまいました。当時は、お葬式も無い時代でした。自分たちだって、いつ死ぬかわからない状態の中、「死んだ」と言う事の重大さすら、なぜかぼんやりしか感じられないのだから不思議です。

生涯忘れられない疎開の思い出の町、上三川。今回の旅で、しみじみ私たちは、戦争とと言うものの、世の中に与える影響を考えさせられました。関東平野の最北に近いこの町、戦争がなければ、平和に時は流れていったでしょう。そして、由緒あるお寺の普門寺も、あの大切な柱に傷を残すこともなかったでしょう。

私たちに限って言えば、この事で自分の子どもに対して、異常なまでの執着を持って育児に取り組んでいたのではないのでしょうか。そして、親と言うものが、自分にとってどれだけ大きな存在だったのか、あの時、はっきり知ったのだと思います。沢山の友達のなかにいながらの孤独も併せて体験した集

団生活だった氣がします。

思い出と言うものは、もう一度あの時に戻りたいと言うものが多い中、私たちにとっては、全く戻りたくない思い出の一つだとおもいます。と思いつながら、しかし、普門寺のイチョウを見つけた時のあの懐かしさは、一体何なのでしょう。やはり、自分にとってこれは、大切な、大切な消せない思い出の一つなのでした。

心の何処かに重いしこりを残して生きてきた私たち、戦争の傷跡をずっと引きずって生きてきた私たちに、ようやくその終止符がうたれた氣がします。

「お寺を尋ねて本当に良かった。」皆の感想です。

そして、二度と戦争をしてはいけません。皆の心に再び蘇った戦争への思いでした。

一九九九年一〇月

.....

一九九九年一〇月に 読者からのお便りを元に放送される
NHK小さな旅「小さな旅 特別編」に採用され、放送されました。